

名字の故郷を求めて

京都府京都市 佐瀬 師成

私には悩みがある。物心ついてから名前をまともに呼んでもらったためしがない。私の名字は「佐瀬」。「サセ」でもなければ、勿論「サトウ」でもない。「サゼ」である。学校では、毎年春になると、若い教師は名簿を横目に自信をもって「サセ君」と呼び、引退間際の先生は、その老眼を細めながらも「サトウ君」と私を呼ぶ。私は、「サセ君」までは「サセです」ときまりが悪そうに反駁するが、「サトウ君」と呼ばれてしまうと、もうその対抗心を失せてしまって、「コイツ漢字が読めないのか」と心の中で悪態をつけて無視する。そしてそのふてくされ顔は友人のお笑い種にといいザマである。しかし、何にも増して酷いのは健康保険証！健康保険証も「佐瀬」にふりがなで堂々と「サセ」と書く始末。初めての病院に行っても薬局に行っても、診察券やら何やらを発行するのに名前を書く。ふりがなをふる。これをすると呼び出される。保険証と私の今しがた紙に記した名前を見比べて「『サセ』と『サゼ』どちらですか？」。この一言に何度、尊厳を傷つけられたことか！私の中では「佐瀬」は「サゼ」なのだ。

電話口でだって酷い目に遭う。例えばレストランの予約をする時。「サゼ」という二文字は妙に聞き取りにくいようで（勿論、「佐瀬」という名字の知名度が低いのも原因だろうが）、「7時に予約

お願いします。サゼと申します」と言っただけで、「ハゼさんですか？」「タベさんですか？」などと、自分の滑舌を疑わせるようなトンチンカンな名字が耳元で連発する。もう嫌になる。

こんな事情は家族も勿論変わらない。父親も初対面の相手には「サセです」なんて名乗っていて、幼心に私は呆れた。大叔父に至っては、あまりにも名字を正確に発音してもらえないから、結婚した時に戸籍名も「サセ」に変えてしまったらしい。その点、祖父は長男としての誇りがあるのか、この名字を愛していて、私の例の保険証を見て怒っていたし、大叔父の話にも陰で苦言を呈していた。もっとも、祖父は福島 of 会津若松市という「サゼさん」の偏在地域に住んでいるから平気なのだろう。確かに、会津では「サゼ」と言うと、対面でも電話口でも一発で伝わって、非常に心地いい。でも日本中他の地域では絶対に伝わらない。変な話だ。

でもちよつと待て。ふと「佐瀬」の文字を見る。これは間違えて当然である。というか「サゼ」と読めという方が無理である。この字面、どう読んだって「サセ」だろう。私がこの衝撃的な事実に気づいたのは中学校二年生の時。中学受験の塾の試験や入試であれだけ名前を書いたのにそんな風に思ったのはその時が初めて。慣れは恐ろしい。いや、最早生まれつきの洗脳だ。しかし苦悶はここからである。じゃあ「セ」についての濁点はなんなのだ。母に相談する。生粋の東京生まれ東京育ちの母は、なんだか小馬鹿にしたような感じで「田舎の訛りなんじゃないの？」と心無い一言。私と祖父が不思議な誇りを感じていた濁点が田舎の訛りでいいはずがない！ そんなはずはない！ でももしかしたらそう

かもしれない…と悩みは深まる一方だ。それにしても母の返答も酷い。私と同じ十字架を背負って「サゼさん」の一員として頑張ってきた同志だと思っていたのに、そのあまりにも「サゼ」への愛のない答えは私を幻滅させた。嫁に行くとはそんなものか。一人っ子で長男の私には一生分かりそうもない。しかしこれは大問題だ。この母の説が本当なら、私や祖父は地元の訛りに執着する田舎者に他ならない。「それでもいいじゃないか。それが伝統だ」なんて言う向きもあるかもしれないが、私は嫌だ。伝統というのは、田舎臭さではなくて、同じ土地に代々住み着く者の中で時間を経ながら洗練されていく、スタイリッシュなものであるはずだ。人間、格好をつけてナンボである。特に都会人の言う「田舎らしさ」なんてものは、「未開」的なものを求めているだけで無責任極まりない。だって都会人は真にそれに憧れていないのだから。話がやや脱線したが、こんな訳で私は名字への関心を引き立てられ、自分探し、否、名字探しを消極的にも開始する。

「本当に訛りだったらどうしよう」と真実を知るのに多少の躊躇がある私はなかなか調査を開始できない。そんなこんなでグズグズしていると中学生の私には最も忌避する時期が訪れる。期末試験である。私の学校は中高一貫校だった。よく言えば自由、悪く言えばガバガバの校風だったので、今思えば別に勉強しなくてもよかった。だが名字にも面倒臭い自意識を覚えるような見栄張り張りの私には家族や教師の手前、それなりの成績が必要であった。いや、少なくとも勉強しているという風に見せる必要があったのだ。嫌なガキである。試験前になると、部活もなくなっって行き場

を失い、そそくさと家路につく。だが家にも帰りたくない。家に帰れば昼寝を見られそうだし、かといって喫茶店に行くお金もない。そんな私のお気に入りは町の図書館であった。夏でも涼しく、冬も暖かい。なんといっても本がある。鉄道好きの私は西村京太郎のサスペンスが大好き。試験期間中に何件の事件を十津川警部が解決したか分からない。その日も新たなミステリー小説を求めて書架を彷徨っていると、ふと大きな事典が目に入る。『姓氏家系大辞典』。ほう。私はその本を恐る恐る手に取った。ゆうに三キロはあるうかというその辞典はズシリと重い。机に本を置いてパラパラめくる。外見はそこまで古くないのに、中を見れば戦前の本のような印刷。「理解できるかな」と不安を覚えながら「佐瀬」の項目を探す。第二五九八ページ。ついに見つけた。でも「サゼ」ではなく「サゼ」なのが不満。「佐瀬」の項目は四項目立てだった。第三項に我が家に関する情報を見る。「3 會津の佐瀬氏 當地方に此の氏多し、第一項の族か。云々」。なるほど、やはり會津に「佐瀬さん」は多いのだ。そして指示通りに第一項に目をやる。

「1 桓武平氏千葉氏支流 中興武家系圖に『佐瀬、千葉氏庶流』と見ゆ」とある。というかこれしかない。そこを詳しく知りたいのに！ とやりきれない気持ちだ。ただ嬉しい情報もある。なんといっても桓武平氏。「平氏の子孫なのか」などと感心する。平氏の中でも桓武天皇の子孫の桓武平氏だ。これで私は多少気分が回復。なんといったって「自分の先祖は桓武天皇だ」と明日から堂々と言えるのだ！ でも「佐瀬」に対する疑問の解明には程遠い。

結論を端的に言えば、満足のいかない、不満の残る情報しか辞書は教えてくれなかった。「あんなに分厚いのこれしか情報がないなんて」と心で呟きながら辞書を閉じ本棚に戻す。全く見掛け倒しだ。またもとの机に戻って、鬱々と窓から見える公園を眺める。カラスが夕焼けに「かあかあ」鳴いている。今思えば、あの時の僕はこんな都会に群れをなすカラスのようだった。たかが名字。されど名字。真っ黒で見分けのつかないカラスの群れの中の自分を他のカラスと見分けてくれるもの、それが僕にとってはおちよっと珍しい名字なのだ。それなのに図書館は僕の名字の答えを、僕の個性に対する保証をくれなかった。

その夜、夕食後、いつものように布団の中でPodを触っていた。目の前に迫る試験という現実からの逃避のためのネットサーフィンだ。その間にも、時計の針は7時半、7時45分、8時と進んでゆく。当時、まだスマートフォンを持っていなかったから、母親のPodが私にとってインターネット世界への生命線であった。当時すでに中学生の間ではTwitterが流行っていて、私も仲間と共に親に隠れながら毎晩、布団の中で興じていた。しかし、さすがに試験前にもなると、浮上(Twitter上)にいることをこう呼ぶ)している人間は少なく、浮上している連中は成績に関しては知らん顔を決め込んでいる奴らばかり。小心者の私は甚だ心配になる。そんなこんなでこの晩はTwitterにも居場所を失い、だけれど勉強はしたくないからネットサーフィン。YouTubeを覗いてもいつもの変わり映えしないコンテンツ。聞き飽きた洋楽のプロモーションビデオばかりが流れてくる。洋楽は好きだが、勉強中に聞

いていたこともあり聞く気にもならない。ふと、数時間前の記憶がよぎる。気づけば無心でグーグルの検索エンジンには「佐瀬」の文字。「検索」をクリック。すぐに知らないオヤジの写真や「佐瀬医院」なる開業医の情報が漫然と出てくる。世の中には「サゼ」だか「サセ」だか分らないが、意外と「佐瀬さん」は多いようだ。だが私の欲する情報はない。それならば検索ワードを変更。これはZ世代特有の柔軟性か。「佐瀬氏」と検索してみる。1秒もしないうちにページは遷移して新たな検索結果が表示される。「武家家伝 会津佐瀬氏」や「Wikipedia 佐瀬氏」が目につく。意外にも自分の名字にWikipediaの項目があったことに歓喜。世の中には自分のWikipediaを書いてしまうような恥ずかしい人もいるようだが、それもやはり承認欲求からなのだろう。まあ自分の名前の知名度が低いことを憂いて、変な自意識で名字のルーツを探る自分も似たようなものか。そしてこうやってその話を茶化しながら書いている自分なんかは承認欲求のカタマリだろう。こんな感じで自分の自己顕示欲を指弾する自分の理性が常にどこかにいるのだが、この理性はネットの情報が玉石混交だなんて気にもとめない。「名字を調べるくらいはいいだろ」と割り切って、まずはWikipediaをあたる。Wikipediaに項目があると言ったってほんの数行だ。はじめに「佐瀬氏(させし・させし)は、桓武平氏流上総氏(房総平氏)の支流である日本の氏族」とある。ふむふむ。ここまでは図書館の辞典と基本的に一緒。意外にも「佐瀬」の読み方として「サゼ」とある。これは嬉しい。さらに画面を下にスクロールして読み進める。すぐ下に「上総権介常澄の四男(一説

には同じ上総氏一族の伊北常仲の四男) 円阿禪師(佐是円阿)が、上総国山辺郡佐瀬村(現在の千葉県東金市下武射田)に住んで、佐是(さぜ)と称した」とある。私はなんだか心にかかった露が一気に晴れたような思い。天岩戸から天照大神が出御されて、世界に光が戻った時、天津神の面々はこんな気分だったかななどと大袈裟にも思った。「佐瀬」は元々、「佐是」だったのだ! それなら話が違う。「佐是」は「サゼ」には読めても「サセ」とは読めない。もともと「佐是」だったなら我が家の名字の「サゼ」の「ゼ」は福島の前田舎の訛りなどで「サセ」が「サゼ」になったのではないはずだ。晴れ晴れとした気分。なんだか「ゼ」に固執してきただけが報われたような思いだ。これなら堂々と「サゼです」と言える。否、言わねばなるまい。なにしろ「サセ」は間違いなのだから。などと全国の「サセさん」を勢い余って否定しながら私は喜んだ。布団からむくりと起き上がり、隣の母の部屋に駆け込む。興奮しながら「サゼ」の顛末を語っても、元々、「佐瀬」に愛着もなくおまけに生粋の理系で歴史には興味もない母にはどうも興奮は伝染しない。それでも興奮で勢い余ってペラペラと語り続ける私。5分もすると母は疲れたような顔をして「風呂に入ってくるわ」と逃げた。名字の違う同居の母方の祖父母に語ってもどうせ共感は得られまい。私はまた自室に引きこもる。

気分も幾分改善されたから「しようがない。勉強でもするか」と机に向かう。だが興奮は醒めやらない。一度の成功に味を占めて、同じ轍を踏むのは人間の性だろう。もっと自己肯定感の向上する情報を求めて、やはりPodの画面にかじりつく。先ほどの佐

瀬氏の Wikipedia をよく読めば、何やら「佐瀬円阿」なる人物がいて、「佐瀬」なる地名があるようだ。意外にも「佐是円阿」にも Wikipedia の項目がある。早速クリック。「佐是 円阿(さぜえんあ、生没年不詳)は、平安時代後期から鎌倉時代にかけての武士、僧侶。平常澄の四男」とある。「サゼ」は意外にも千年近く昔まで遡れるらしい。「佐是円阿」の項をさらにみる。「上総国山辺郡佐瀬村に住んで佐是を称した。千葉県市原市の佐是城は、円阿が堀の内に「館」を構えたのが始まりとされる」ともある。なるほど「本当に佐瀬という地名があるのだなあ」と舞い上がる。しかしよく調べるともう前者の佐瀬村はないようだ。なんだか悲しい。「地名とはこんなに簡単になくなってしまうのか。そもそも名前なんて勝手に人間が作ったものだ。諸行無常とでも言うべきか。移ろいやすくって儂い」。なんて、先祖は「円阿」とかいふ僧侶だからと気張って、ちよつとした仏道の求道者みたいなふりをしても悟りの境地になんか程遠いこの馬鹿な中学生は、後者の「佐是」が今でも千葉の市原市にあると知り大喜び。一喜一憂とはまさにこのこと。

こうなれば、もう「佐是」に行きたくてたまらない。「佐是」に行けばなんだか自分のルーツを感じられる気がする。自分の名字が元になった地名があるなんて、なんだかロマンがある。やっぱり自意識過剰。結局、Google マップで「佐是」と検索。千葉県の中央部、そして市原市の中央部に「佐是」はあった。蛇行する養老川の西岸で、「佐是」の中心部には大多喜街道が貫き、小湊鐵道が走る。周囲にはゴルフ場が多い。だがコンビニもあるよう

だし、「佐是城」なる城跡の周囲にはお寺も多い。私はのどかな南関東の街道沿いの田園風景を頭に思い浮かべる。きつとそういう感じだろう。地図を航空写真に変えてみる。やっぱりそうだ。田んぼが一面に広がって、ポツポツ集落がある。そしてその真ん中にはお寺がある。なんだかホッと安心した。それは会津の風景に近いものがあるからだ。もし「佐是」が歌舞伎町のような都会的な歓楽街であったり、団地や新興住宅地の連なる都会の付属物のような街並みであったりしたら嫌悪すら覚えたかもしれない。やはり「サゼ」の名を冠するところは、多少田舎的であっても歴史や伝統を感じさせるような場所であってほしいのだ。勿論、「佐是」も会津の村々も「佐是円阿」が見た風景とは違う風景であろう。だが、春には青々と繁茂して、秋になると首を垂れる稲作の風景だけは変わらないはずだ。このあたりに本当の「伝統」があるような気が私にはする。

さて、こんな自己肯定感の低さから自分の名前を冠した地名を見つけてしまったこの中学生は机に向かいながらウキウキしている。明日の授業が終われば、すぐに鉄道研究室の部屋に行き、時刻表を借りて「佐是」までの行き方を調べるのだ。そして試験が終わればすぐにでも訪れようと心に決めるのだった。